

ラジオ放送
＜令和2年1月～3月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.430

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☎️ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送 生き方の向きを変える
金光教教務総長 西川良典 page 1

- 心の掃除
本部在籍 金光浩道 page 5

- 焼肉店の帰り道（「信心ライブ」）
page 9

- ホトケのマサ子さん
三重県・松阪新町教会 水野照雄 page 14

- 大雨の日の特急列車（「信心ライブ」）
page 18

- 初めての試練
岡山県・邑久教会 小林眞 page 23

- 姑の口癖
香川県・花之宮教会 堀江和子 page 27

- 斜視と四歳の誕生日
兵庫県・御立教会 成田さち子 page 31

- 人の身に無駄ごとはない
東京都・芝教会 宇都木員夫 page 36

- 左手肘頭骨骨折物語
京都府・船岡山教会 大引明子 page 40

- あの時、布団の中で
兵庫県・曾根教会 島谷一久 page 44

- 天ぷら屋 大繁盛の理由（「ピックアップ -仕事-」）
大阪府・大阪教会 白神紀美雄 page 48

- 神様の歯車（「ピックアップ -仕事-」）
page 52

《年頭放送》

「生き方の向きを変える」

金光教教務総長

西川良典にしかわよしのり

皆様、新年おめでとうございます。共々に令和2年の新春を迎えさせていただきましたこと、心よりお慶びよろこび申し上げます。

さて、私たちの社会には、地位や名誉、それに学歴、財産といったものを尊ぶ風潮があります。それによって人柄や家柄というものを評価するわけです。例えば、会社では、課長より部長、部長より社長というように、肩書きが上がることに価値があると考えます。

一方、金光教の信心では、世間のそうしたものを認めないというわけではないのですが、問題にしなくてもよいのです。肩書きの有る無しに関わらず、その人がどのような生き方になっているかということのほうに重きを置きます。

ご信者さんで、ある会社にお勤めの女性がおられます。その方は、会社の創業祭の責任者になったので、その取り組みについて神様にお願いするために、先日教会へお参りにこられました。

これまでの経緯、各担当ごとの内容、地域社会や顧客への広報などについてお話しされました。お話を聞いていくうちに、その方は、「自分は一生懸命に頑張っているんですが、ちぐはぐなことばかりが起きてくるんです」と言わ

れ、まさに孤軍奮闘の状態にあることが分かってきました。そして、「自分を責任ある立場に

祭り上げておきながら、上司や部下の協力が無い」と、だんだん感情をあらわにされ、しまいには、「長い間、会社のために尽くしてきたのに、会社の協力が得られないということであれば、この際、夫とも相談して、辞めたいとさえ思うのですが、どうでしょうか」と仰ったのです。

私は、お話をじつと聞かせてもらいながら、神様に祈りました。すると、互い違いなことばかりが起きてくる、みんなの協力が得られない、裏切られたというような感情しか持てないというのは、この方が普段の生活から根本的な考え違い、心得違いをしてしまっておられるから、

土壇場でそうしたことになるのではないかと思つたのです。

そこで私は、その方に申し上げました。

「教会へお参りするというのは、自分の生き方を神様の願いに添った生き方に正していくためなんです。お話を聞き、教えに添った生き方に正す。神様の願いと私たちの願いとがずれていては、おかげは頂けません。例えば、私たちはこのようなおかげを頂きたいと願っている。神様のほうは、神様の願いに沿った生き方をしてくれと願っておられる。このように両者の願いがちぐはぐであったら、おかげを頂くことができないのですよ。

教会で聞いたお話を家庭や職場で実践することが大切なんです。私たちを生かしてください

ている天地のお恵みや、生活していくのにお世話になるものへ心を込めてお礼を申していくという生き方は、一見何でもないように思われるかもしれませんが、このことは家を建てる際の基礎工事をしていようなものなんです。基礎工事さえしっかりしておれば、どんな家でもビルでも建てることのできるじゃないですか。

ところが、往々にして自分の都合だけをお願いする、目先のおかげさえ頂けばそれでよいというような生き方になりやすいところがあります。このような『神様を使う』だけの生き方は、基礎工事ができていませんから、いざ家を建てるようになった時に、柱が足りない、瓦が届いていない、請け負った業者が日程通りに仕事をやってくれない、というように互い違いなこと

が起こつてくるんですよ。

『神様を使う』だけの生き方では、神様が向こうのほうにおられて、こちらから一生懸命にお願いするという一方通行になるんです。自分のあり方を問題にしなくてもいいわけです。しかし、それでは必ず後から、『私は一生懸命に頑張ったのに、誰も労いの言葉を掛けてくれなかった』『私の努力があつたからこそ、立派にできたのに』というように、周囲の人たちに対して恩着せがましい心が湧いてきます。それは、神様の願いに添うことにはならないのです。

一方、『神様に使つていただく』という生き方は、教えをよく聞き、実践する。つまり体の中でお働きくださっている神様を現していく生き方です。『神様、ここまでできました』とお

礼を申し上げ、『次はこのようにさせていただきますので、よろしく願います』とお願いをする。そうすると、神様がご都合を付けてくださり、思った以上に仕事が展開していくんです。

もし、あなたが本気で教えに取り組めば、お世話を下さった人をいとおしむ心が生まれてきます。『よくも私のような者を会社に置いてくださったものだ』『私のような使いにくい人間についてきてくれる』というように、謙虚な気持ちになり、感謝の心が生まれてくるんですよ」
このように申し上げました。

するとその方は、「よく分かりました。最近
は忙しさにかまけて、お参りをしてお話を聞く
ことができておりませんでしたから、自己中心

になり、心がすさんでおりました。そのすさんだ心が自分に跳ね返って、周囲の人を責め、仕事を辞めようかと寂しい思いをしなければならなかったんですね」と仰いました。

信仰の世界では、「神様を使う生き方」から「神様に使っていたたく生き方」へと、その向きを変えることが大切であります。そのような向きになれば、周囲の協力が得られ、盛り上げてくれる。そのようなおかげを頂きたいものがあります。

どうぞ、皆様にとりまして、今年が良い年になりますように、お祈り申し上げます。

《先生のおはなし》

「心の掃除」

岡山県・本部在籍

金光浩道 こんこうひろみち

長女が2歳半の時の話をさせていただきまず。家族で地元イベントに参加して、午後8時すぎに帰宅しました。普段よりは遅い時間になりましたが、いつもどおりバタバタと子どもたちの歯を磨くなど、寝かし付ける準備をしていた時のことです。

子ども部屋から、ゴンという鈍い大きな音がしたかと思うと同時に泣き声が聞こえてきました。音を聞いて嫌な音だと直感し、急いで、「どうした？」と子ども部屋に入ると、2歳半の長

女が、転んでベッドに顔を打ち付けた様子で、唇から血が流れ落ちておりました。妻が言うには、パツクリと深く切れているとのこと。口のけがは治りやすいともいわれますが、かなりの出血で止まりません。時計を見ると、もう9時になろうとしています。どうしたものかと妻と話し合いましたが、やはりここまでパツクリ割れていたら、病院で診てもらわないといけないだろうということになり、早速、町内の病院に電話を掛けました。すると、「今夜の当直の先生は内科の先生で、外科的な処置はうちではできません」との答えが返ってきました。しょうがないので、もう1軒思い当たる町内の病院に電話しました。すると、その病院からも同じく、「今夜の当直の先生は内科の先生です。傷

跡が残るといけないので、専門の外科の先生に見てもらったほうがいいと思いますよ」と言われ、隣の市の大病院を2軒勧めてくださいました。

その隣の市の大病院までは車で大体30分ほど掛かります。さてどうしたものかと考えながら、もう1軒病院を思い出し、電話してみました。やはり同じく当直医は内科の先生でした。「この大変な時に、この辺りの病院3軒とも外科の先生はいないのか。こんな時に限って…」と思わず愚痴が出ていました。

その時ふと、整形外科をしていた幼なじみのことを思い出し、彼に電話で相談しました。すると、取りあえず傷口を見たいので写真を送ってほしいとのこと、早速、携帯電話で写真を

撮って送ったところ、彼は、「うーん、パツクリいつてるけど、ばんそうこうで止めて様子を見るかもしれないなあ。でも跡が残るといけないし、形成外科の先生がいたらきれいに治してくれるだろうけど、この夜の時間に形成外科の先生はまずいないだろうしなあ」ということでした。

妻とも話し合い、「まあ、お医者さんに診てもらうのにこしたことはないだろう」ということになり、パジャマのままの長女を車に乗せて、車で30分掛かる隣の市の大きな病院の救急外来、夜間受付へ行かせてもらいました。外科は1時間待ちとなりましたが、実際には30分ほどで名前を呼ばれ、診ていただけました。

外科の先生は、周りの何人かの先生たちと、

いろいろ、「ああしよう、こうしようか」などと相談されており、「唇を縫うにしても、もし唇の端っこのラインがずれたりしたら大変なんです」などと説明してくださいました。その直後です。先生が、「ちようどこの後10時に形成外科の先生が来られますよ」と仰ったのです。

時計を見ると、まもなく10時です。「え、形成外科の先生に診てもらえるなんて！ 何てありがたいことだろう」と感激しました。そうして、傷をきれいに治してくださいさるスペシャリストの先生に、すぐに手当てをしていただくことができました。

普通に傷を縫う場合よりも細い糸を使うようで、さすがに慣れた手付きです。素晴らしいス皮ードで、唇を3針、そしてぶつけた時に歯が

当たって切れた口の中を2針、縫ってくださいました。夜遅い時間に、しかも、まさかこんなにすぐに形成外科の先生に出会うことができ、治療をしていただけるとは思ってもみなかったので、心からありがたい気持ちになりました。

しばらくしてこの夜のことを思い返してみました。長女がけがをした当初、近くの病院に電話を掛けまくっていた時は、「この辺の病院は、何でけがを診てくれる先生がいらないんだ。こんな大変な時に……」とイライラしていた自分がありました。近くの病院に内科の先生しかいなかったこと、それが実は大きなおかげであり、それがあつたからこそ、後に形成外科の先生に出会えたわけです。

しかし、その時は目の前のことしか見えておらず、浅はかな人間考えでイライラしていた自分を思い出すと恥ずかしくなりました。自分の欲だけで我を通して愚痴を言っていた自分は、まだまだ未熟だなあと反省させられました。

このような時に思い出す金光教の教祖の教えがあります。

「座敷、押し入れ、板の間にちりが積もるように、人間は我欲のためにわが心にちりが積もる。わが心わが身が汚れないように、心と体の掃除をするつもりで、今月今日で信心をせよ」という教えです。イライラしたり愚痴を言ったりすると、心にチリが積もっていきます。神様は、どんな時にも、その場その場で最高最善のおかげを下さるのです。心にチリをためないよ

うに、常に素直な気持ち、みずみずしい気持ちを維持したいと改めて思わされました。



《先生のおはなし》

「焼肉店の帰り道」

おはようございます。

今日は、金光教東旭教会の平阪真太郎ひらさか しんたろうさんが、令和元年7月に大阪の玉水記念館でお話しされたものをお聞きいただきます。

皆さんは、普段の生活の中で、イライラすることはありますか。平阪さんは次のようにお話しされました。

妻と食事に行っただんです。それまでちょっと忙しくしていて、ようやく出来た時間だったの
で、焼き肉ランチを食べに行こうと妻を誘った

んです。

その店には以前に行ったことがあるんですけど、ここのカルビ定食が絶品なんですね。席に座りまして早速カルビ定食を注文しました。

待っておりましたら、もう3分もしないうちに肉が運ばれてきました。自分で焼くタイプなのです。生肉が運ばれてきた。ところが、「あれ？いつもと違うな…」と思ったんです。明らかにカルビじゃないでしょみたいな肉が運ばれてきたんです。カルビというのは脂が乗っていて、さしが入っている。それがないんです、全く。もう赤茶色なんです。注文する時に僕が間違ったのかなと思ひまして、「私、カルビ定食を2つ頼んだんですけど、合ってます？」

と店員さんに聞いたたら、「はい、こちらカルビ定食です」と仰ったんですね。「え？」と。これ、どう見てもハラミなんですよ。「え？ハラミですよな？」「いやカルビです」「え？そうですか？」と。まあ、私も生肉見ただけで肉の種類当てれるほど肉に詳しいわけではありませんから。まあ焼いてみないと分からない。焼いてひとくち口に運びました。そしたら、もうハラミ独特の臭みといますか：私ね、ハラミが食べられないんです、実は。苦手なんですよ。すぐに店員さん呼びまして、「すみません。あのう、これ焼いて食べたんですけど、やっぱりハラミでした」と言ったんです。すると店員さんが、「いや、いつものカルビです」と。いや、いつものカルビって…。「すみません、申

し訳ないんですけど、私、ハラミダメなんでね、分かるんです。これはハラミなんですよ」「いや、カルビです」と言いますから、私もどうしたものかなと思っておりますね。私があまりにも困った顔をしておりましたから、店員さんもしびれを切らしたかのように、「ちよつと厨房まぜいに聞いてきます」と言って、下げてくださったんです。「ああ、良かった」と思いました。厨房に行ったら、もうはつきりしますからね。それで厨房に持って行ってくださったと思うんですけどね。

その店員さんが持って帰って来られて、「厨房に確認しましたけれども、カルビです！」と言うんです。私は、「絶対ウソや！ 何でそんな意固地に言うんだ」くらいに思うわけですよ。

だけど、もうそこまで言われたら、それ以上言っても仕方がないなと思いました。でも、残すのももつたいないし、感じ悪いだろうから、「うん、どうしようかな」と思っていたら、妻がテーブルの辛みそを指さして、「これを付けて食べてみたら」と言ってくれたので、大量の辛みそを付けて食べました。妻はハラミが好きですから、私の分も食べてくれて、何とか食べ終わることができたんです。

でも、私の心がもうずっとモヤモヤしているんです。「なぜそんなに認めてくれへんのやろなあ」という思いで。もう帰日もイライライライラしながら帰ってくるわけです。

ただどね、私はその本当にイライラした気持ち、ちが、そう長くは続かなかったんです。スツと

私のイライラが無くなったんです。なぜこのイライラが無くなったかと言いますと、帰り道、自転車をこぎながら、「神様、もう助けてください！ もうイライラモヤモヤが止まりません。何とかしてください」と。小さいことだけれども、「私のイライラモヤモヤが止まりません。助けてください」とお願いしたんです。吐き出したんですね。

そうしましたら、私の胸に、あることが思い浮かんできたんです。それは何かと言いますと、先ほど、この日を迎えるまで忙しくしていたと言いましたが、実は3日連続会合がありました、3日連続会食があったんです。この3日連続脂っこい物ばかり食べてたんです。私の胃腸はひよっとしたら…：自覚はなかったですけど

も、限界ギリギリだったかもしれない。もしかしたら神様が私の胃腸を氣遣って、「お前、今日もカルビを食べるんか。止めとけ。今日は、ヘルシーな赤身の、ハラミにしておきなさい」と神様が私の体を氣遣って、ハラミを私に食べさせてくれたんじゃないだろうか。もちろんそんなこと証明できませんよ。証明できないけれども、そう思えたんです。思えたのは事実です。その瞬間に、私のイライラモヤモヤは吹き飛びまして、逆にありがたい気持ちにすらなれたんです。

怒りとか不安とか、私たちの心をむしばむ感情というのは、自分で抑え込むのは至難の業だということがよく分かりました。自力では無理なんです。どこかに吐き出さないといけない。

吐き出さないと消えないんです。では、どこに吐き出すか？ 「人」に吐き出すのではなくて、私たちには「神様」、「教会」、「教会の先生」という吐き出す場所を与えていただいていると思うんです。吐き出さないと新しいものが入ってこないですね。心配になったり不安になったりイライラしたら、もう自分の心が満杯になってしまおう。そこに、「こういう時にはこういふふう」に思いなさいよ」ということをいくら言われても変えられない。いったん吐き出さないと新しいものが入ってこない、このことを私は学ばせてもらいました。

人は何か壁にぶち当たった時に、どんな心になつたら良いかというのは、大体みんな知ってるんです。だけど、なるうと思つてなれない。

「思う」ということは、自力だからだと思っ
んです。自分が思おうとしている。自力だから、
ここには辛抱とか無理が伴う。でも、「思える」
というのは神様がそう思わせてくださるん
です。

イライラした焼き肉店の帰り道、私は神様に、
「もうお願いします。イライラモヤモヤを何と
かしてください」と言った時に、ああいうふう
に思えた。神様が私のためにそうしてくださ
ったと思えた。これは自然だからスツと入って
るんです。

いかがでしたか。

皆さんは、イライラやモヤモヤした感情を抑
え込んでいませんか。実は私も以前、心配な気

持ちで押し潰されそうになった時、教会の先生
に打ち明けて、楽になったことがあります。

つらい時、苦しい時、正直に神様に訴える、
もしくは教会の先生に聞いていただく。まず吐
き出すことが、全ての壁を乗り越えていく大き
な力になるのです。



《先生のおはなし》

「ホトケのマサ子さん」

三重県・松阪新町教会 まつさかしんまち
水野照雄 みずのてるお

マサ子さんは77歳。10歳下の妹と2人で暮らしています。長年勤めた仕事を定年退職し、両親を送り、そうこうしているうちに妹も定年を迎え、気が付けば、2人だけの生活も随分長くなりました。マサ子さんは車の運転ができないので、教会へはいつも妹さんの運転で2人一緒にやってきました。教会だけでなく、買い物や何やという度に、一緒に出掛けています。若い頃にはいろいろあったようですが、今ではまあ仲の良い姉妹です。

そういえば、こんなこともありました。いつものようにそろって教会へやってきた2人。おもむろにマサ子さんが、「先生、聞いてください。この子にえらい怒られたんです」と口を開きました。すると、すかさず妹さんが、「いや、それは姉さんが」と返します。

私の目の前で何かが始まりそうになったので、そのやりとりを制しつつ、詳しく聞いてみると、何か高いところの物に手を伸ばして、マサ子さんが椅子の上に立とうとしたところ、バランスを崩してこけてしまい、あばらを強打したという事件があつて…そのことについて、妹から強くたしなめられたというのが、事の次第でした。

いつものように息の合った掛け合いで、そこ

までしゃべってしまうと、いつの間にかもう他の話題に移っていました。そして、何やかやと笑い合いながら話が続きました。

私が、「マサ子さんは、ほんとにいつも明るいですね」と口を挟むと、「ええ。私、ホトケのマーちゃんって言われるんですよ」とマサ子さん。

どういうことかという、マサ子さんはいつもニコニコしているし、話が楽しいので、友だちとお茶をしても、彼女が加わると、その場が一遍に華やかになるんだそうで。そこで、いつしか「ホトケのマーちゃん」と言われるようになったそうです。

すると、ちょうどいいタイミングで妹さんが、「この人、おしゃべりなんです。病院の待合室

で、隣の人と楽しそうにしゃべっているから、

『どなた？』って聞いたたら、『今初めて会った人』なんてこと、しよつちゆうなんですよ」と情報をくれます。そして、もう1つ追加情報。

「でもね、以前はそんなことなかったんですよ。若い頃は怖かったんですよ。私もよく叱られました」と。

ちよつと意外でした。おしゃべりで明るいマサ子さんからは、その姿が思い浮かびません。でも、本人もうなずいて、「昔はオニだったかも」。曲がったことが嫌いで、キチンとしなければ気が済まなくて。職場でも無駄話なんて、もつての外。結構きつく周りに当たってきたかもしれません。特に、この子には厳しかったと思います」。そんなふうに振り返ります。

「それがどうしてホトケに？」と尋ねる間もなく、マサ子さんは、「やつぱり、信心していると、考え方とか変わってくるんですね。相手の気持ちを考えることもいるし。こっちが気付かないところでお世話になっていることもあるし。お互い様ですよ。ほら、金光こんこう様が『あいやかけよ』って言うてはるやないですか」と続けます。そして、「何より、楽しいほうがよろしいやないですか」と。

そんなマサ子さんが、病気を患いました。たまたま受けた検査で乳がんが見付かったのです。さすがにその時はショックも大きかったです。マサ子さんが、お医者さんに向かつて、「私、もう死ぬんですか」と問い詰めたことを、教会にやってきて姉妹2人の掛け合いで、笑い

も交えながら教えてくれました。

教会ではもういつものマサ子さんでしたが、急に真顔になって、「私、長生きしたいんです」と言います。そして、「私がいなくなったら、この子が独りぼっちになってしまう。それが可哀想で；だから、どうしても良くなりたいたいんです」と続けました。妹さんもこの時は、神妙な顔でうなずいていました。

程なく治療が始まりました。幸いにして発見も比較的早かったので、まずは手術、そして、抗がん剤治療が続くことになりました。マサ子さんの入院中、妹さんは毎日のように看病に通い、教会にも立ち寄って姉のことを願っていました。

治療の中でも抗がん剤はつらかったようで

す。その1つとして、髪の毛のことがあります。

ようやく姉妹で教会へ参拝することができるようになった時、マサ子さんは、ニットの帽子をかぶっていました。それを取るなり、「先生、赤ちゃんみたいになってしまいました。ほら」と言いながらニッコリ。あまりの笑顔に、こちらまで思わず笑ってしまいました。やがて髪の毛も生えそろいましたが、以前とは打って変わって、雪のように真っ白になりました。それはマサ子さんによく似合う、とても綺麗な白髪でした。

マサ子さんは、「もう死ぬんじゃないかという不安もありました。逆に、もう死んでもいいと妹に言ってしまったこともあります。でも、違うんですよね。手術してもらったこともできた

し、妹も優しくしてくれるし。金光様も『死ぬ用意をするな。生きる用意をせよ』って言うてはりますもんね」。こんなふうに話します。

「信心していると考え方が変わってくる」とマサ子さんは言っていました。それは、心の向け方や生き方にも及ぶのでしよう。しなやかで、そして強い。そんな生き方に、信心は人を導いてくれるのだと、マサ子さんの姿を見ていて教えられました。

《信心ライブ》

「大雨の日の特急列車」

おはようございます。

今日は、福岡県苅田^{かんだ}教会の教師、深見徳久^{ふかみ のりひさ}さんが、平成30年10月、小倉^{こくら}教会でお話しされたものをお聞きいただきます。

深見さんは、平成30年7月、西日本豪雨が起こったその日、長崎での用事を終え、特急列車で福岡へ帰るところでした。

何か土産を買わんと、長崎まで行って手ぶらで帰るんもいかんということだね、私の母親の好物のカステラがあった。よし、これを買^こうて

帰ろう。喜ぶじゃろうと。これ1本だけやたらいけん。うちの家内にも買わないけんな。そしたら2本買おう。2つ買って特急に乗ったんです。さあ、そこらとんでもないことが起るんですよ。

ものの10分あまり走ったでしようか。列車が緊急停車するんですよ。そうしたら車内放送がありました。「ただいま大雨が降っており、列車が止まっております。ここですばらくの間、待機させてもらいます」というんです。

「まあこれも仕方ないな。今日中に帰ればいいや」と思つて、気が付いたら1時過ぎ。お腹空きますわ、そりゃ。9時台の列車に乗つとるから、お昼の用意なんか私は当然してないし、周りもしてません。困ったな、どうしようかな。

パツとバッグを見たら、「お、カステラがある。悪い、1本だけ開けさせてくれ」と思うて1本出しました。それでパツと見たんです。この通路の横に若いカップルがおるんです。後から分かったのですが、これは新婚旅行なんです。

この2人がおったんで、当然「ああ、この人も皆お腹空いとるだろう」と、そのカステラを、私は手を付けずに、「おたくらお腹空いたでしょう。どうぞ食べてください」と言いました。それで後ろを振り返ってみると、何人もおるわけです。「そしたらまあ皆さん、どうぞ取ってください」「ありがとうございます」と皆さん取っていくわけですよ。「もうええ。もう1個出そう。ああ、お土産がのうなったなあ。まあしかしカステラはいつでも買えりゃあ」という

ことで2つ目を開けました。「皆さん、どうぞ食べてください」と。みんな「ありがとうございます」と。みんなお腹空いとるんです、そりゃ。皆さんそれを食べましてね、喜んでくださった。

そしたら私の横に、1人の男性が来まして、「すいません、おたくは宗教関係の方ですか」と言うんですよ。「はあ」と言うたら「私は浄土真宗の坊主です」と。「さっきから、おたくが何か手を合わせて祈つとるようなところを見掛けたんで、何をされとんかと思うて」と言う。「実はこうこうこうで、みんながやっぱりこうね、けがもなく無事に目的地に着かないけなからということを祈らせてもらつとったんです」。「はあ、どういう方ですか」と言うから、

「こうこうこうじゃ」と言うたら、「金光教の方はそういうことをお願いするんだなあ」と言われる。

そこで話をしとつたら、この隣に座つとる若いカップルが立ち上がるんですよ。「皆さん、この駅の近くにコンビニがあります。私らが今から買い出しに行きます。皆さん、欲しい物があつたら言うてください」と言うんですよ。「はあー」と思った。私が考えも付かんことを言う。ほんと強う降つとるんです。ザーザー降つとる。それで2人が帰つてきた。もうずぶ濡れです。私はその時、ほんとに神様と思うたです、この2人を。それで皆に配るんですよ、それぞれ。そしたら2人は着替えてきて横に座るから、「皆さん、後ろにおられる方も前に来てください。」

一緒に話しながら頂きましたよや」と言うたらね、皆さん、前の方に来るんですよ。それでみんなで話をしながら、そのおにぎりとかパンとかを頂いたんです。

そして、またしばらくして、もう何か薄暗くなりかけた頃、また2人が立ち上がるんですよ。「もう1回買い出しに行きます」と言う。「何か要る物があつたら言うてください」と言う。「うわあ」とまた頭下がる思いでした。2人はまた買い出しに行くんです。そして、帰つてきました。「好きなだけ取ってください。」といます。そしたらね、その兄ちゃんが肩を叩いて、「おじさん、ビール飲むでしょ」と言うて。「大好き」「買ってきました」。何とうれしゅうてうれしゅうて。こんな所でね、生まれて初

めてその炊き出しみたいなきことを経験したし、

そんな何時間も閉じ込められる経験した。みんな
なでワイワイ言いながら頂いたんですよ。そし
たらね、他の乗客も、「皆さん、あめ玉でよか
ったらあります」と言うておばあちゃんが出し
たりね。もう私うれしゅうなつてね。こんな所
におつてありがたいなと。

それを頂いておると今度は、おにぎりの差し
入れが地元の方からありました。これはありが
たかった。もうほんととお腹空いとつたんですけ
どね、温かいおにぎりなんです。「おにぎりい
っぱい作つとるからいくらでも取つてくださ
い」。ほんとに生まれて初めての経験です。テ
レビなんかでよく炊き出しと見ますけどね。
私はそこにおつてね、ほんと手を合わせたんで

す、ありがとうて。

みんなの祈りと人を助けるといふこの2つか
ら、神様が生まれてきたんだなあと、ほんと思
わせていただきました。教祖様はね、「自分の
ことは次にして人の助かることを先にお願いせ
よ。そうすると自分のことは神が良いようにし
てくださる」。このように教えてくださつてい
ますね。ほんとにそういうふうに思わせていた
だきました。

いかがでしたか。突然の思い掛けない出来事
に、イライラしたり不安や心配にとらわれたり
してしまいますが、皆の無事を神様に祈り、何
か人のためにできることはないかと願つていく
中で、互いに助け合う心が生まれ、温かい場と

なっていく。日々、様々なことが起こってくる
中で、いつでもこのような祈り合い、助け合う
心を大切にしたいと思います。



《先生のおはなし》

「初めての試練」

岡山県・邑久教会 小林眞

3年前のことです。車で1時間ほどのところに嫁いでいる娘の姑しゅうとめさんから、1本の電話が。

「困ったことが起きました。優ゆうさんが入院したんです」

「え？」

娘の優が風邪を引いていたのは聞いていましたが、まさか入院とはびっくりです。

事の次第はこうです。高い熱とせきも続くので近くのクリニックで診察を受けたところ、た

だの風邪とのことで薬を飲んでいました。ここまで聞いていました。ところが、いつまで経っても熱は下がらずせきも出るので、大きな病院で診てもらったところ、マイコプラズマ肺炎にかかっていて、それも重症化しているので即入院ということになったのです。

娘には2人の男の子がいます。当時、上の子は幼稚園に通っていたので大丈夫なのですが、下の子は2歳になったばかり。ですので誰かが面倒を見なくてはいけないのですが、娘の主人も、すぐ向かいに住んでいる舅しゅうと、姑もみんな勤めがあり、おまけにちょうど3人共忙しくて休むわけにはいかないというのです。わが家なら安心して孫を預けられると思ったのでしよう。その根拠は、孫はバアバが大好きなこと。

そして料理はバアバだけでなく、ジイジである私も少しはできること。おまけにジイジはいつも家…と言っても金光教の教会ですが、勤めには行っていないので面倒を見てもらえると踏んだのでしよう。

夜はたぶん、バアバがうまく寝かし付けてくれるはずですが、朝は私一人になることが心配です。バアバは、週に5日、午前中はいないのです。それと、もっと大きな不安材料もありました。孫はこちらの言うことは理解できても、まだうまく話ができないことです。でも、そんなこと言っではいられません。孫の面倒を見ることができるのは、わが家しかないのですから。

結局、孫はお父さんが勤めから帰ったらすぐに連れてくることになりました。そして、別れ

ができなくなるといけないので、わが家でバアバと対面して大喜びしている隙に隠れるようにして帰るといふ打ち合わせどおり、お父さんはトンボ返りで帰ってしまいました。そんなことなどつゆ知らず、孫はすぐに大好きなチャーハンを自分で食べ、バアバと一緒に風呂に入つて寝る準備です。時々思い出したようにお父さんを探しますが、バアバに本を読んでもらったりしているうちに何とか1日目は無事終了です。

果たして、心配した次の日の朝がやってきました。私はドキドキしながら孫が起きるのを待っていました。6時になっても7時になっても一向に起きる気配がありません。そのうち、「じゃあジイジ、頑張つてよ」と軽い笑みを残

してバアバは出掛けたのですが、出掛けてすぐ、気が付くと布団の上で上半身だけ起き上がった孫がシクシク泣いているではありませんか。それはそうでしょう。目が覚めたらよその家。おまけにバアバはいない。ジイジと2人きりなのです。祈るような気持ちで、「チョコレートパン、食べる?」。そう尋ねると、「チョコレートパン」に反応してすぐに台所へ走って行ってくれたのです。やれやれ、これで大きなハードルだった寝起きはクリアです。後は、これも大好きなヨーグルトを食べさせたり、テレビに守りをしてもらっている間にお昼ごはんのお好み焼きの準備です。

こんなふうにして何とか3日間が過ぎ、週末は孫の家でお父さんと過ごし、そして日曜日の

夜、孫は再びやってきました。2度目の預かりです。今度はさすがに疑心暗鬼だったのでしよう。バアバを見ても、なかなかお父さんから離れようとしません。それはそうでしょう。一度だまし討ちに遭っていますから。それでも、「家にお母さんはいない」ということにただならぬ何かを感じていたのでしょうか。ちゃんとバイバイができたのです。後で少しだけ泣きましたが。

実を言うと、最初、娘の入院、孫の預かりという現実を突き付けられて、少し心配でした。朝、大泣きして収拾がつかなくなるのでは、そう思うとどうしても心配になるのです。でも、どうなるのか決まってもない先のことを心配してもどうにもなりません。心配するのではなく、

そこをどう神様にお願ひするかです。それをよくよく考えているうちに、私は自分の大きな間違いに気付いたのです。

病気になるまで、娘一家はおかげでみんな元気に暮らしていました。そのことに改めて感謝をすることが抜けていました。願うのはそれからでした。そして、今回の願ひの中心はどこなのかを考えてみたのです。すると、私が困る困らないなどは二の次のことで、何よりも大事な願ひは、「娘の病気が回復すること」、そして、「孫が悲しみのどん底に落ちることがないように」ということだったのです。そのことを願うのと同時に、預かる側にできることは何か考えました。孫の守りをするのなら、せめて好きな食べ物、好きなテレビ、好きな遊び、少なくとも

もそれくらいは知っておかないと話になりません。

そして4日後、無事に娘も退院し、家族3人で孫を迎えに来たのですが、お母さんの顔を見た途端、すぐに走り寄って抱っこしてもらった時の、あんなうれしそうな孫の顔は今でも忘れることができせん。

計1週間、2歳児は2歳児なりにしっかり事実を受け止め、一度もむずかることもなく頑張ってくれました。おかげで私の心配もほとんど杞憂きゆうに終わりました。

《先生のおはなし》

「姑の口癖」

香川県・花之宮教会 はなのみや 堀江和子 ほりえかずこ

おはようございます。パーソナリティの大 おお
林 はやし 誠 まこと です。

朝、家の前を掃除してましたら、通り過ぎる
見ず知らずの高校生たちが、男の子も女の子も、
「おはようございます」と声を掛けてくれるん
です。今時信じられないかもしれませんが、私
の住んでいる田舎町には、会う人会う人にあい
さつしながら通学している高校生が結構いるん
ですよ。朝の何でもないあいさつですが、「あ
あ、いい子たちだなあ」と思うと、何だかうれ
しくなって、「今日も頑張ろう」という気持ち

になれるんですね。

今日はそんな、言葉が持つ不思議な力につい
てのお話です。話し手は、香川県高松市にあり
ます金光教花之宮教会、堀江和子さんと、タイ
トルは「姑の口癖」。

姑は現在89歳で、身体障害者1級と要介護2
の認定を受けています。そのため、毎朝7時半
に、私は姑の部屋まで朝食を運んでいきます。
神様へ朝のお祈りを済ませ、車いすに座って待
っている姑に「お待たせしました」と言うと、
必ず「すみません、ありがとう」という言葉が
返ってきます。テーブルにご飯とみそ汁、おか
ず、お茶を置いてある間にも「ありがとう」。
箸を手渡すとまた「ありがとう」。しばらくし

て食器を片付けに行った時も、「びちそうさま、ありがとう」と言います。私は、「どういたしまして」と言って部屋を出るのですが、姑のその言葉は、朝の慌ただしさの中、私の心を軽くしてくれます。

8年前、姑は重い脳梗塞脳梗塞を起こし、右半身が完全に動かなくなっていました。それとも回りにくくなり、ベッドに座ろうとしてもすぐにバランスを崩して倒れてしまうという状態になってしまったのです。

姑は、子どもの頃から金光教の信心に触れ、結婚してからも近くの教会に舅しゅうとと共に毎朝お参りを続け、神様のことを第一に考えて生活を進めてきました。心筋梗塞を起こし、命が危なかつた時でさえ、神様に心を向けていれば、必

ず良いほうに導いてくださるといふ強い信念で病気を乗り越えてきた方だったので、今回も大丈夫だろうと私は思っていました。

しかし、入院して間もない頃、私が身の回りの世話のために付き添っていると、小さな声で「こんな体になって…もう生きていたくない」と言うのが聞こえてきました。こんなに気弱な姑の姿を見たのは初めてで、驚いた私はどう声を掛けてよいのか分かりませんでした。

気丈な姑も自分の体が自由に動かせないもどかしさ、私たち夫婦に迷惑を掛けて申し訳ないという思い、そして大好きな洋裁がもうできなくなるというつらさなど、不安で押し潰されそうになっていたのだと思います。

身の回りの世話をしながら、神様にどうか良

いようにとお願ひする日が続きました。その間、次々と家族や遠くに住む親族、以前からお参りしている教会の先生が姑のお見舞いに来てくださいました。姑は、「みんなから祈られている」と感じ、感謝の気持ちでいっぱいになったそうです。そこからこれまでの信念がよみがえり、気弱な言葉は一切出なくなりました。さらに、看護師さんや理学療法士の方たちが一生懸命にお世話くださることがありがたく、申し訳なくて「すいません、ありがとうございます」とお礼を言わずにはおれない気持ちになったそうです。姑は動く左手左足にお礼を言いながら、少しでも自分でできるようにとリハビリを頑張り、半年後には左手で食事や着替えができるようになり、退院しました。

右半身が不自由になったことで、多くの人や物にお世話になって生きていくことに気付かされた姑は、前にも増して「すいません、ありがとうございます」と、何度も何度も言うようになりました。

週3回通っているデイサービスでも、お世話になった時には必ず「すいません、ありがとうございます」と言っているようです。スタッフの方から、こんな話を聞いたことがあります。「堀江さんは時々気難しい利用者の方の近くで過ごしてもらうことがあるんです。しばらくしたら、その方の顔がだんだんと緩んで、落ち着いて一日を過ごして帰られるので、本当に助かっています」と。

素直にお礼を表す姑の周りには笑顔があふれ、無くてはならない存在になっています。

金光教の前の教主が、「世話になるすべてに礼をいふ生き方ゆらぐ心にやすらぎもたらす」「世話になるすべてに礼をいふころ人が助かり立ちゆくころ」とお歌を詠まれています。姑の生き方は、まさにこのお歌そのものように思えるのです。

「すみません、ありがとうございます、お世話する側とされる側の心をつなぐばかりか、人が助かり立ち行くことへつながっていく力を持っていると思います。その言葉の大切さを感じ、私も姑のようにお礼の心を素直に表せるように取り組んでいきたいと思っています。」

いかがでしたか。ちよつとしたあいさつの言葉でさえ、人を元気にすることがあります。ま

して、真心からのお礼の言葉には、人間同士をつなぎ合わせ、お互いを幸せにしていく、とても大きな働きがあるんですね。言葉という神様から頂いたこのすばらしいものを、今日も心を込めて使わせてもらいたいと思います。皆さん、お聞きいただきありがとうございます。

《先生のおはなし》

「斜視と四歳の誕生日」

兵庫県・御立教会 みたち 成田さち子 なりた

おはようございます。パーソナリティの大林誠です。

今日は、兵庫県姫路市、金光教御立教会の成田さち子さんによる「斜視と四歳の誕生日」というお話です。成田さんは、子育てに奮闘する中で、ある大切なことに気付かれます。それは何だったのでしょうか。お聴きください。

私は個性豊かな5人の子宝に恵まれました。

数年前までは毎日騒々しくしておりますが、

次々と大人になり、末の子が選挙権を頂く年齢までに成長させていただいております。

今日はその中で、次男のお話をさせていただきます。

平成5年の2月、この世に元気な産声を上げました。すくすくと育ち、母乳だけでこんなに大きくなるのですかと、医師が驚くくらいです。腕や足は立派なボンレスハムのごとく堂々として大物感を漂わせる風貌ふうぼうでした。

歩き始めますと体が少し身軽になりまして、やんちゃに磨きが掛かりました。自宅は金光教の教会で、いっどなたがお参りになられても良いように戸が開け放されていますので、それをいいことに、こっそりと車の通りまで出ていき、何度か親切な方に助けていただくこともありま

した。さらに、2階の物干し台から、屋根に抜け出て歩いているのを発見した時もあり、その時ばかりは心臓がひっくり返るかと思いましたが。もう片時も目が離せません。でも天真らまんで好奇心旺盛なキラキラとした瞳の持ち主で魅力を持った子どもでもありました。

そんなふうに元気に成長していた次男でしたが、3歳の大みそかのこと。急に片方の瞳が目のほうにぐぐっと寄っていることに気が付きました。私は昔、病院でお勤めしていたこともあるので、これは脳腫瘍しゅようでも出来たのかと心配になりました。年が明けて、大きい病院を受診しますと、案の定、医師は、「斜視だね。ただこの年齢で斜視になるのは遅いね。もうすぐ4歳ということなら小児がんも疑うので、すぐに

頭部CTを予約して調べましょう」と。私はその言葉に頭がくらくらして、どうやって家に戻ったのか記憶がありません。家族に何と説明したのかも覚えていません。1つ覚えていることは、金光教本部の近くに住んでいる実家の両親に手紙を書いて送ったことです。

両親は、改まって娘が手紙を送ってきたということは何か大変なことがあったに違いないと感じたそうです。手紙には、「大変な病気かもしれない。4歳のお誕生日を元気に迎えられるいかもしれない事態になっているから、お祈りをお願いします」という内容を必死に書いたと思います。両親はこれは一大事と、すぐに金光教本部にお参りしてくれました。そして両親からは、「手紙をご神前しんぜんにお供えして、祈らせて

もらっているからね」と言葉を添えてくれました。
た。

そして頭のCT検査当日、保育園を早退して病院に行きました。睡眠剤のシロップを飲ませますと、抱っこしていた次男の体からだんだんと力が抜けていき、私はその時なぜか、「ごめんね…」と目が潤んでしまいました。検査室の方に次男を託し、私は手を合わせて、「金光様、金光様、金光様…」と祈り続けました。

その後、診察室に呼ばれ、医師の安堵あんどの表情と目の前のCT画像を見た時、一瞬で助かったんだと感じました。その画像に映る次男の脳は、白く輝く形の良い、それはそれは美しいものでした。

診断は「遠視による斜視」とのこと。医師が

うれしそうに説明してくださいました。私も本当に遠視で良かったと感謝しました。

以前、あのやんちゃな次男が水路の横の道路を怖がってしがみついたことがあり、不思議に思っていました。その理由もようやく分かりました。物が2つにダブって見えるので、道路の端が分からなかったのですね。

こうして発症から約2カ月後、4歳のお誕生日を無事に迎えることができました。お誕生日を迎えられるということがどんなに素晴らしい、ありがたいかということを感じた出来事でした。私は検査の結果がただ単純に小児がんではないことが判明したというだけでなく、あの時神様がピカピカの命を下さったと思わずにはいられませんでした。

次男の斜視の治療は、手術には適さない症状だったため、眼鏡を使った治療法で通院を重ねました。そして中学に入る頃には、治療を卒業できました。

私が子どもの頃、金光教本部にお参りすると、先代の教主金光様が度々、「お礼が先じゃ」と教えてくださったのを思い出します。息子の斜視の一件があつてから、そのお言葉が改めて胸に染みてくるのです。いろいろな悩みや心配も、命があつてのことなんですね。息子が大人になるまで、この他にも様々に困難なことがありましたが、その都度、あの時命を救われての今日だと思ひ直し、まずはお礼を申させていただきます。ております。

いかがでしたか。

私も2歳の時に肺炎になったことがあつたところで、「あの時は年末だったから、診てくれるお医者さんが見付からなくて、雪の降る中、あなたを抱いて、町中を探し回った」と、母がよく話しておりました。

私たちは誰も幼い頃のことを覚えていませんが、親たちはどれほど手間暇かけて育ててくれたことかと思わされます。

そして、大きくなつてからも、いかに多くの人や物のお世話になつてのことか。危ないところを神様に救われながら、気付かずじまいのことも幾度となくあるんだろうと思います。

目の前の問題に一喜一憂しがちな私たちですが、生きているからこそそれもできるんですね。

今ある命のありがたさ、不思議さをかみ締めて、
今日一日を大切に過ごさせてもらいましょう。



《先生のおはなし》

「人の身に無駄ごとはない」

東京都・芝教会しば 宇都木員夫うつぎ かずお

おはようございます。パーソナリティの大林誠です。

私たちは、思いも掛けない災難に出くわした時、どんなことを考えるでしょうか。「どうしてこんなことになってしまったのか」と原因探しをして嘆き続けるということになりがちですよね。

しかし、今日ご紹介するお話は、それとはちよつと違う考え方を提示してくれています。東京都、芝教会の宇都木員夫さんのお話で、「人

の身に無駄ごとはない」。

私の奉仕させていただいている金光教芝教会には、専従の教師の他に修行生の方もいて、日々の御用を一緒に勤めています。このお話は、8年前の修行生の身に起きたことです。年齢は当時22歳で、教師になるための金光教学院を卒業したばかりの九州の方でした。

前任の修行生との引き継ぎも終わり、7月から1人で本格的な御用が始まりました。ところが、1週間を過ぎた頃、突然右眼の痛みを訴えました。「眼が痛くて眠れない」と言うのです。すぐに近くの眼科に行かせました。診断の結果、眼球には何の異常も認められないということ、痛み止めをもらって帰ってきました。しか

し、翌日の朝も、「痛くて一睡もできませんでした」と言うのです。3日目には「右眼が霧がかかった状態で、何も見えません」と言います。再び眼科の診断を受けたところ、すぐに近くの大学病院に紹介状を書くので、全身の精密検査を受けるようにと指示されました。

大学病院でMRI、血液検査など徹底的に検査をした結果、「多発性硬化症^{たはつせいこうかしょう}」という、国が難病指定している病気であることが分かりました。この病気は、自分の免疫機能が自分自身の神経を異物と見なして攻撃するという恐ろしい病気で、右眼から脳につながっている神経を免疫機能がボロボロにした結果、右眼が見えなくなっているということでした。10万人に1人くらいの確率で発症し、そのままにしておけば10

年後には車いすの生活になる可能性もあり、有効な治療法は見付かっていないということでした。検査した医師は、彼にそのことを伝えました。

22歳の青年が、10年後には車いすの生活になるかも知れない。しかも治療法が確立していないと言われ、相当のショックだったでしょう。この時提示された治療法は、「血小板交換」というもので、大変強い副作用があり、苦しうでした。

大学病院では主治医の先生が、脳、血液、眼の専門医と共にプロジェクトチームを組んで、病院をあげて治療に当たると言ってくださり、難病指定の認可が下りれば医療費を免除されることも分かりました。その代わり、この病気の

研究発表に使わせていただきたいということでした。

彼は相当悩んでいました。一時は、「治らないのであれば、実験的な治療はやめて、金光教本部に戻って、信仰でおかけを頂きたい」。また、「高額な差額ベッド代で親に負担を掛けたくない」と心配していました。

私は、教会長である妻と共に毎晩病院へ行き、彼と話をしました。彼は治療を決心し、そして、約1週間で右眼は少しずつ視力を取り戻して、2カ月で退院できました。

ところで、なぜこんなことになったのでしょうか？ 私は1つの考えに至りました。

それは、この病気が金光教学院に入る前、または、在学中に発症していたら、彼は金光教の

教師になれなかった。次に、卒業して九州の教会で発症していたら、芝教会へ修行に来ることはなかった。では、どうして芝教会に来てわずか数週間で発症したのか？

私には神様のお計らいとしか思えませんでした。なぜなら、教会から歩いてわずか7分のところにある、この大病院は、当時、多発性硬化症の国内屈指の先端医療の病院だったので。神様は、教師になったばかりの彼に、この病院の治療を受けさせてやろうとお計らいくださったに違いないと、私は確信したのでした。

退院した彼は、ぜひ修行を続けさせてほしいと言いました。しかし、退院してもつらいことが待っていました。週に一度、予防のために自分でふとももに注射を打たなければなりません。

ん。翌日は大変苦しい副作用があり、ほとんど寝て過ごしていました。また、温かいお風呂は禁物で、体温より少し温かい程度のシャワーしか浴びられません。熱い湯に入ると一気に病状が悪化するということです。

そんな中、彼の考えは少しずつ前向きに変わっていきました。「この難病を乗り越え、信者さんの前で、『私はこうしておかげを頂きました』というお話をさせていたきたい。この病気を乗り越えるのが楽しみです」と言いました。私はこの言葉に、彼は必ずこの難病を克服するものと確信しました。

そして今、彼は結婚をし、子どもにも恵まれ、元気に活躍しています。

いかがでしたか。

金光教の教祖は、「神様は、人の身の上に決して無駄事はなされない。信心しているがよい。みな末のおかげになる」と教えています。話し手の宇都木さんも、難病にかかった青年も、病気の原因より、その意味を考えようとしたのですね。「この経験から、何を学び取ればよいのだろうか。これをどう生かしていけばよいのだろうか」と、希望を持って未来を見つめているわけです。

私たちの身にも、いつ、どんなことが起こるか分かりませんが、決してうろたえることなく、出来事の意味を深く受け止め、生かしていく目を持ちたいものです。

《先生のおはなし》

「左手肘頭骨骨折物語」

京都府・船岡山教会 ふなおかやま
大引明子 おおびきあきこ

私は去年の夏、左手の肘ひじを骨折した。肘の頭の骨と書いて「ちゅうとうこつ」。ちようど肘の先に当たる。そこがポキンと折れた。事の顛末てんまつはこうである。

8月半ば、お盆の京都。その混み具合は半端ではない。まして駅は人であふれかえる。私は右手に大荷物、左手に小さな紙袋持って歩いた。突然、目の前に小さな赤いカバン。子ども用の小さなスニーカーである。「え！」と思う間もなく、カバンに足は引つ掛かり、ドツタ

ーン。あわれ、私は左手を下にして地面に突っ伏した。

「痛っ！」。折れたと思った。周りの人が一斉にこちらを向く。「い、い、痛い」。かつこ悪いし立とうと思うが、動けない。

数分後、やっと起き上がったものの、左手はぶらんとしたまま。上げようとすると痛い何の。ズキズキでもなくて、ジリジリでもなくて、何とも痛い。ひたすら痛い。見ると、ペッコーン。左肘の先が凹くぼんでいるではないか。え、どこ行ったん、この骨？ 確かあったよなあ。
「ごめんなさい」

小さな声が聞こえた。赤いカバンの持ち主、5歳くらいだろうか、可愛い男の子だ。お母さんの後から、カバン後ろに引つ張って歩いてた。

持ちにくかったのか、そのカバンが右に寄り、左に曲がったり…そして突然私の足元に：まあ、仕方ないか。

病院でレントゲンを撮ると、肘のだいぶ上、一つだけ他の骨と離れて、ひらひらまるでチョウチョのように浮かんで見えるものがある。「あなたの折ったのは、この骨です」。え、折れてこんなとこまで行ってたのか。先生は、「これからますますこの骨は離れていきますよ。手術して、ボルトでこの骨をつなぎ止めましょう」と仰る。え、わが人生初の手術。しかし、骨折して手術って、よく聞く話だ。今なら20分ほどで手術も済む。たかが…とは思わなかったけれど、何だか軽い気持ちだった。手術は1週間先となった。

利き手の右手でなくて良かった。足でなくて良かったね。みんなそう言うし、私もそう思う。右手だと包丁も持てない。瓶も開けられない。第一、食べるにも苦勞する。足だとそれこそ大事だ。左手だからこそ手術までの1週間、今までどおり暮らしていけると思っていたのだけだ…。

ところがどっこい、あにはからんや。例えば、包丁は持てる。しかし、左手が押さえてくれないから、ニンジンも玉ねぎもごろごろ転がり逃げてゆく。「あらららら」。ゆでたり炒めたりも、左手でお鍋の取っ手を持ってないから、危なっかしくて「怖いわ」。焼くのも炊くのも盛り付けるのも体ごと動かして、それでもうまくいかない。

「左手骨折しても右手があるさ。手術までの1週間、いつもどおりに暮らせればいいや」と考えていた私のもくろみは見事に外れ、以後はレトルト食品のお世話になることにした。他にも掃除洗濯、全て思いどおりにいかない。

翌週の手術は無事に終わった。だが、麻酔が切れた後、痛い痛い。こんなに痛いとは。先生は、「骨を触っているから少しは痛いですよ」

と仰ったが、想定外の痛さ。さらに手術後3日目にはもうリハビリが始まる。これまた痛い。一番痛いのは折れた時のはずだったが、リハビリのほうも痛い。週に2回もあるし。痛いと言ったら、ついにリハビリの先生に怒られた。「治りたくないの？ 止めてもいいよ。でも治らないよ」。聞けば痛さに挫折する人も

いるという。リハビリしたらいいとも簡単に治ると思っていたけれど、並大抵のことじゃないのね。「痛い、痛い」と通っているうちに、それでも5カ月が経ち、だんだん左手も動くようになった。そして先生が、「まだ手の動きが不十分なのは、腕の中に入れたボルトが邪魔してるかも。手術で抜きましょう」と仰る。ああ、また手術。

しかし、次は慣れたのか、それほど痛みを感じることもなく無事終了。ただ中に入っていた10センチほどのボルトには驚いた。こんな大きな太い物で骨をつないでいたのね。

そしてまたひと月。「まだ骨は完全には出来ていませんが、後は日にち薬です」と先生が仰り、骨折から半年、ようやくと治療は終わった。

そして今。骨折から1年経った。左の肘を触りながら、私は不思議で仕方ない。あるなあ骨が。1年前ペコンと凹んでしまつてた肘の先っぽに、きちんとしつかり骨がある。半年前、ただこの骨は不十分だった。「以後は日にち薬です」と先生が言った。その「日にち薬」の間にはわが骨はすっかり元どおりになつたのだ。

日にち薬とは、関西でよく聞く言葉だけれど、「後は日にちを重ねていくうちに傷は癒え、病は治るでしょう。それが何よりの薬ですよ」という意味。この言葉を聞くと人は、もう治つたような気についついなる。でも私は、日にち薬つて神様が働いてくださる時じゃないかなと、この手を見ながらふと思う。お医者でも薬でもなく、神様しか働くことができないその日々を

「日にち薬」というのではないかなと。

入院10日。手術2回、通院10回。リハビリ33回。お医者様の働きと、つたないながらの自分のリハビリの努力と、そして神様のお働きがあつて初めてわが手は回復したのです。

もう普段は何も気にすることなく使っている左手。これを大切にに使わせてもらうのが、これからの私の務めだなあと思うのです。

《先生のおはなし》

「あの時、布団の中で」

兵庫県・曾根教会 そね 島谷一久 しまたにかずひさ

これは私が小学2年生の時の話です。

ある日、母が仕事の都合で帰りが夜遅くなり、私は、母が帰ってくるまで寝ずに待つことになりました。

これは、「お母さんが帰ってきたらウワツと布団から飛び出して、『おかえり！』と大きな声を出して驚かしてやろう」という子どもながらのいたずら心からのもので、眠たい目をこすりこすりしながら、幼い私はその時を待ちました。

しばらくして、いつものように母のスクーターが家の前で止まり、それからガチャガチャと玄関の鍵を開ける音がし、私は急いで布団の中に潜り込んで、母が部屋に入ってくるのを息をひそめて待ちました。

しかし、待てど暮らせど母は家に上がってきません。外の様子をうかがってみますと、玄関先で何やら話し声がしていました。

「あなたもこんな遅くまで大変やなあ」

「はい、何とか頑張ってやらしてもらってます」

どうやら母は隣に住む親戚のおばさんと立ち話をしているようでした。そして、おばさんの次の言葉に幼い私は息をのんだのです。

「あなたも主人を亡くして、これから子ども

4人を育てるのは大変だと思う。ものは相談だけど、もしよかったら、あの子をウチに引き取らせてくれん？ あの子を私の家にもらえない？」

何とおばさんの言う「あの子」というのは、私のことなのです。

犬の遠ぼえの聞こえてくる静かな夜のそばり、布団に潜り込み息を殺しながら聞いた予期せぬ言葉に、幼い私はどれほど驚き、不安になったことか。

「そんなん嫌や。絶対嫌や！」

私は布団をギュッと握り締め、心の中で叫びました。

当時の状況を説明しますと、その親戚のおばさんの家の子どもは女の子ばかりで、男の子は

おらず。また、私の母は父を突然に亡くし、これから女手一つで4人の子どもを育てなければならぬという事情があり、それを心配しての申し出でもありました。

加えて申しますと、一族経営で商売をしていた家の大黒柱であった私の父が突然亡くなったから、母に対する一族の中での風当たりが日増しに厳しくなり、守ってくれる父もおらず、ただただその状況に必死に耐えるだけの母は、苦しくつらいどん底の状態にあったのです。

「あの子をウチにもらえない？」という思わぬ大人同士の会話を耳にした私は、ドキドキしながら母の言葉を待ちました。母は次のように言いました。

「ご心配ありがとうございます。けれど、絶

対に子どもは離しません。子ども4人とどんなに苦勞しても、みんな一緒に生きていきます。

私は離しません」

丁寧にはつきり断ってくれました。大きな声でした。

それから母は家に戻り、子どもたちの寝顔を見に、私たち兄弟が寝ている部屋に入ってきました。そして布団を隔てた向こう側から母のシクシクすすり泣く声が聞こえてきました。母からすれば、寂しくつらい、また悔しい涙であったと思います。

寝たふりをしていた私としては、もう母を驚かすことはできません、布団を頭からかぶったままスースーとうその寝息を立てているうちに、そのまま朝まで眠り込んでしまいました。

そこから私の母は一生懸命信心に励み、いろんな苦勞を通って私たち兄弟4人を今日まで育て上げてくれました。今では私たち兄弟4人はそれぞれいい年になって、母は可愛い孫たちにも恵まれています。

あの日から30年以上の月日が経ちましたが、私自身、これまでうれしいことやつらいこと、いろんなことがありました。その度ごとにあの時布団の中から聞いた、「一緒に生きていきます。私は離しません」と言った母の大きな声と、あの時の泣き声が私の中からよみがえってきて私を励ましてくれるのです。

今も耳に残っているあの時の声、これが私の生きる元気の源です。

金光教の教祖の教えに、「神の綱が切れたと

いうが、神は切らぬ。氏子から切るな」というものがあります。この「神は切らぬ」という言葉を聞くと、私はあの時の母の姿を思い出します。私が布団の中で聞いた声は、まさしく神様のお心、お声だったに違いありません。

神様は、日々私たちと一緒に暮らし、苦楽を共にしてくださいます。しかも、私どもが手を合わせて拝むよりも前から神様のほうが私たちのことを思い、良くなれ良くなれと先に拝んでくださっていて、懸命にお守りお骨折りにくださっているのです。

その神様のお心は、人間氏子が可愛いという親心であり、「必ずお前を幸せにするぞ。それが親としてのワシの務めじゃ。自分の気持ち折れてしまうたら、この子が助からん。決して

諦めんぞ。決してこの手は離さぬぞ」と、神様が自身に言い聞かして励む、そんな覚悟のこもった必死な親心の声が、「神は切らぬ」という言葉だと私は確信しています。

この神様の切なる願い、神様がぎゅっと固く手を握り引つ張ってくださいていることをよく知って、私は神様に身を委ねて安心し、人事を尽くしていきます。この神様と一緒に真剣にご信心していきます。この手は離しません。

いまだに耳に残っているあの時布団の中で聞いた母の声。「神は切らぬ」という神様の親心に触れた感動、温もり。これが私の信心の原点です。

私は、母からこの信心をもらいました。もらって良かったです。

《ピックアップ ―仕事―》

「天ぷら屋 大繁盛の理由」

大阪府・大阪教会 白神紀美雄しろかみきみお

私の奉仕する教会にお参りになる方で、60年以上続く天ぷら屋さんの店主がおられます。お名前は、四宮明さんしのみやあきら。お店の屋号は「武蔵」むさし。

四宮さんは今年で80歳になります。

ある日のことです。見たことのない2人が、じーっと四宮さんのお店を眺めていました。四宮さんは不思議に思い、「何しましょー」と声を掛けましたが、2人は「いや、結構です」と言っ
て買おうとはしません。四宮さんは、「変な人たちやなー」と思いながらも、気にせず

そのまま仕事を続けました。そうこうしていると、2人は近付いてきて、「おっちゃん、味見してもええかな」と言いました。四宮さんは快く、「かまへんよ」と答え、名物の串カツを差し出しました。2人は「うん、おいしいなあ」と顔を見合わせ、「おっちゃん、お店は何時からやってるの?」「年はいくつ?」などといういろと質問をしてきました。四宮さんは、「何やこの人ら」と思いながらも質問に答えていると、最後に2人は名刺を差し出しました。その名刺にはテレビ局の名前が記されており、2人はある番組のディレクターだったのです。2人は「おっちゃんの店なら大丈夫や。また改めて取材に来るから、その時はヨロシク」と言っ
て帰っていきました。

2人が帰った後によく状況を把握した四宮さんは、「えらいこっちゃ。うちみたいな小さい店より、商店街の中にもっと大きくて立派な店がなんぼでもあるのに……」と思い、商店街の会長さんの所へ走って行きました。早速に事の次第を説明すると、「四宮はん、良かったやないか」と会長さんは大変喜ばれ、「商店街あげて応援するで」と逆に激励されたのでした。

それから数日後、再びテレビ局の人が来店し、「撮影する日が決まりました。まず、お昼に料理の撮影をし、夕方からは芸能人が3人来て、試食の撮影を行います」と言い、打ち合わせは終わりました。

いよいよ本番の日を迎えました。当日は、商店街の人も店を手伝ってくださり、店の前は早

くからうわさを聞き付けた人々でいっぱいでした。いよいよ撮影のスタートです。大勢の人が見守る中、四宮さんは次々に天ぷらを揚げ、陳列棚はいろいろな天ぷらでいっぱいです。お昼の撮影が終わり、夕方が近付くにつれ、ますます見物客が増えてきました。「よい、スタート」の合図とともに夕方の撮影が始まると、テレビでは何度も見たことのある3人の芸能人が武蔵にやって来ました。3人は天ぷらを試食しながら、「おいしー」を連発し大絶賛です。撮影は無事に終わり、お店の正面には番組のステッカーが誇らしげに貼られました。1週間後にテレビで放映され、その翌日からは連日大盛況！他府県からもお客さんが次々に来て、まさに飛ぶように天ぷらが売れました。では、な

ぜ四宮さんのお店が選ばれたのでしよう。

四宮さんは昭和23年に、徳島県から実の父親の弟であり、「武蔵」の創業者でもある叔父さんの元へ養子に入りました。義理のお父さんは商売に対して厳しく、また、熱心な金光教信者でもあり、若き日の四宮さんは商売の心得はもちろんのこと、生活全般にわたって厳しい指導を日々受けました。その1つの証拠があります。

テレビ放映の打ち合わせの際、ディレクターから「私たちはいろいろなお店に取材に行きますが、個人経営で、さらに油関係で、こんなに綺麗な厨房は見たことがありません」と言われたことです。決して広くはないお店で、日々朝から晩まで200度を超す油で天ぷらを揚げ続ける、店の中は油だらけになります。しかし、四

宮さんは油まみれになった冷蔵庫や、天ぷら屋にとっては命ともいえるフライヤーやその周辺を、毎日顔が映るようになるまでピカピカに磨きます。

そこには四宮さんが日々「祈り」や「感謝」を大切にしている気持ちが表れています。

毎朝の出勤時には、まず神様にお祈りをします。その次に冷蔵庫とフライヤーに対し、「いつもありがとうございます。今日もよろしくお願います」と心を込めて祈り、来てくださるお客様に対しても、「神様が連れて来てくださったお客様」と思っ一人ひとり心を込めて応対します。そして閉店の時には同じように感謝の祈りをされるのです。さらに、お店の近所に住む四宮さんは、寝る前にも再びお店に行き、

「火事が出ませんように…」と祈ることが日課となつていきます。「これをしなかつたら気持ちが悪うて寝られしまへんねん」と照れくさそうに言われます。

天ぷら屋「武蔵」を営んで今年で61年。「今までで一番うれしかったことは何ですか？」と尋ねると、「そうやねえ」と考えながら、2つのことを言われました。

「1つはテレビ番組に出たことやね。今までの苦労や辛抱を神様が褒めてくださったように思います」

「そもう1つは、8歳の誕生日にお客さんが花の鉢植えをプレゼントしてくれたことやね。何で僕の誕生日を覚えてくれとったかは分からんけれども、商売のご縁を通しての人の真

心がすぐくうれしくありがたかった」と教えてくれました。

お客様とのご縁や調理器具を大切にされる四宮さんの心にこそ、天ぷら屋「武蔵」大繁盛の理由わけがあるのでしょう。

《ピクアップ ―仕事―》

「神様の歯車」

今日も数え切れないほど多くの人たちが、同じような人たちが、同じような時刻に目を覚まし、同じような服装に身を固め、決まった時刻の電車に乗って、職場職場へと流れていきます。

「自分は会社という大きな機械の、いつでも取り替えられる1つの歯車に過ぎない。しかも自宅と職場を行ったり来たり、毎日同じことの繰り返し。自分の人生って、いったい何なのだろう?」。通勤電車に揺られながら、ふとこんな疑問を胸に抱く人も多いでしょう。

静岡県に住む野崎^{のざきやよい}弥生さんが23歳で会社を辞

め、今の仕事を始めたのも、そんな思いからでした。彼女が始めた新しい仕事は、お母さんが経営している和紙の店を手伝うことでした。会社で働いた経験を生かせば、店の経営も充実させていけるに違いないと、弥生さんはかなり自信をもっていました。確かに数カ月後、乱雑だった在庫の管理や伝票の整理などは、随分改善されました。しかし、肝心の売り上げはなかなか伸びていきません。また自分の経営方針と親の意見が食い違い、この仕事にもすぐに行き詰まりを感じるようになったのです。これがきっかけとなって、弥生さんは、幼い頃から何度もお参りしたことのある金光教の教会に、毎朝続けて参拝するようになりました。

金光教の教会では、先生に神様へのお礼や願

い事などをお話ししますと、先生が神様の教えに基づき、人間としての真実の生き方を、その人その人の問題に即してお教えくださいます。人の願いを神様に、そして神様のお心を人に伝えるこの働きを「お取次とりつぎ」といいます。

弥生さんは、早速先生にお取次をお願いしました。親を説得する方法や、売り上げを伸ばす方法を教えてくださると期待していたのです。ところが先生は、「何事もお礼の心でさせていただきますきなさい。一日何回ありがとうと言えるか、やってごらん」と仰ったのです。彼女はがっかりしましたが、他にどうすることもできず、その日から教えられたとおりによってみることにしたのでした。

最初のうち、何かにつけて「ありがとう」と

言ってはみるものの、ちつともありがたくはありませんでした。けれども、朝参りの時、先生から信心のお話を聞かせていただくうち、これまで自分の力でやったのだと当たり前のように思っていたことも、神様のお働きがあつてこそのできたことなのだ、しみじみ分かつてきました。すると、お客さんはもちろん、商品や店にも心を込めてお礼が言えるようになったのです。

その後、ある日のお取次で、彼女の心は大きく転換することになりました。それは「私は神様に、『売り上げが伸びますように』と、いつもお願いしていますが、これは欲張りなお願いではないでしょうか」とお伺いした時のことです。「欲は捨てなくてもよい。神様に心を向け

て商売していたら、君の願いが自分勝手なものか、神様の願いに沿うものなのかは、神様が決めてくださるよ」という先生の言葉に、弥生さんはハッとしました。「これまでこちらから一方的に願うばかりだったけれど、神様にも願いがおりなんだなあ」と気付かされたからです。

それからというもの、神様は私に何を願ってくださっているのだろうと、これまでとは全く逆の方向から何事も考えてみるようになりました。すると、親は私に何を願っているのだろうかと考える心の余裕も生まれ、これまで店のことでよく口げんかをしていたのがうそのように、ぶつかり合うことがなくなってきたのです。

商売の上でも、「どうすれば買ってくれるか」ということより、「お客さんは何を望んでいる

のか」をまず考えるようになりました。そして、少しでも喜んでいただきたいという気持ちから、月に1回、無料で和紙の手芸教室を開きました。教室には毎回10数人の人が楽しみにしてきてくださるようになり、この人たちの口コミでお客さんも次第に増えていきました。

このようにして彼女の取り組みは、店の経営充実にも自然とつながってきたのでした。

弥生さんは今、26歳。店の仕事をしながら、ふと3年前会社を辞めた時のことを思い出すことがあります。考えてみると、結局今の仕事も、毎日同じことの繰り返しです。また自分が1つの歯車として動いていることにも、全く変わりがありません。

けれども今、彼女の顔は仕事の喜びに生き生

きと輝いています。それは、お取次を通して心が神様に向かうようになったからに違いありません。

「会社にいる時は、私がやるんだ、私でなければと、いつも我を張って仕事をしていました。

だから、他の人でもできるんだと気付いた時、自分自身を見失ってしまったのだと思います。

でも今は、神様が店の主人だと思い、『あなた様の願いに沿わせてください。そして人々のお役に立たせてください』と願っていますから、神様が歯車として使ってくださいれば、それがうれいんです」と弥生さんはこのように話します。

今日多くの職場では、仕事に手応えを感じ、そこから生きがいを見いだすことが大変難しく

なっている現状があります。ある人は仕事がつまらないからと趣味に生きがいを見いだそうとし、ある人は仕事はお金をもうける手段にすぎないと割り切っています。

しかし、人や会社に使われているという意識を超え、神様の願いに応えようと積極的に仕事に取り組む時、組織とか会社とかの枠を超えて、私たちは直接世の中の人々と向き合うことができます。仕事が生きがいとなる可能性も、そんな取り組み方にこそ開けてくるのです。

「神様が私を使ってくださいる！ それがうれしいのです」という野崎弥生さんの言葉は、ともすれば自分自身を見失いがちになる私たちに、1つの道しるべを与えてくれているといえるでしょう。

金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送 日曜日 あさ4時50分

東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

